春 岡 村 の 伝 説

弘化4年、岩手の盛岡藩士がこの辺りを調査した件

開国より 20 年ほど前のことです。春岡や七里、大和田、片柳のあたりはその昔、南部郷とか南部領と呼ばれていたことから、岩手の盛岡藩士晴山忠太は、かつてこの地が南部侯の領地だったのか、そうでなかったのかを調べてくるようにと、藩の内命をうけこの地にやってきました。岩槻の市宿に着くと、さっそく南部領の村々をくまなくめぐり、地元の人に「この地が南部領というのは、かつて南部様の鷹場の場所だったとか、南部様のご領地があったとかいうことですか」と尋ねまわりました。そして晴山忠太はここ深作にもやってきました。忠太が書いた報告書「岩槻御旧地探索秘記」によると…

「深作村というところの八木橋七兵衛が、紀州徳川殿の鳥見をしているので、もしかすると昔のことを知っているかもしれないと聞き、見沼用水に沿って行ってみた。八木橋七兵衛の屋敷（今の JA 春岡あたり）の前の通りに百姓家の居酒屋があったので、そこから七兵衛の屋敷を見回したところ、長屋門は瓦葺きで 13 間（23 メートル強）もあり、門の右側に通用門もあって、かなり大きな屋敷のようである。門の向かいの茶屋で三人ほど酒を呑んでいる者がいて、どうやら七兵衛の家来のようである。そこで話を聞いてみると、八木橋家は元々この村で代々百姓だったが、5、6 代前の先祖が金子（きんす）を献納して紀州家の鳥見になったという。紀州侯がこの屋敷に御成になったこともある。屋敷の奥庭などは、江戸からここまでで三番とはくだらない立派な庭だそうだ。」

それから晴山忠太は八木橋家にむかい、湯を一つ無心し、家の人にこの辺はいつ頃から紀州候の御鷹場となったのか、と尋ねた。しかし「昔から」という答えで、年号も知らないというので「自分は修行の者でご面倒をおかけしますが、御鷹場のことでお伺いしたいことがあるので、七兵衛様にお目にかかりたい」と取次いでもらったが、病気を理由に断られてしまった。代々八木橋七兵衛は、紀州候の御鷹場の鳥見役として、南部領 26 カ村を預かり、名字帯刀を許され、三人の家来と米 30 俵を与えられていた。

晴山忠太はその後、代山村（現在の緑区）で煙草屋のあるじに話を聞いている最中、偶然八木橋七兵衛を見かける。納戸色の小紋で竜紋の羽織に脇差をさし、二人連れで歩く八木橋七兵衛は、煙草屋の話では、蹴鞠が好きで大門に蹴鞠をしに行くところだということだった。

東三番街　平山由喜